三井家之憲

三井宗竺遺書

全

口伊9
1736

早稲田大學圖書
門 伊 9
號 1736
卷

遺書

一今度宗壽居士御遁世ニ付以家法を相改建置候間其趣子孫永々相守相違有間敷事

一我家者宗壽より傳一流ニ候家業致相続候ハ至益繁昌在る事是祖父之冥加之子孫弥疎ニ不存事

一御公儀時々御法度之趣主人ハ不及申手代下々迄早速申聞せ堅相守可申候並博奕諸勝負堅仕間敷事

一同苗共益心を同ふし上に立ルもの之下戒免

ぐみ下たる者ハ上をうやまふ可し我ルを忘
事にしてむつまじく候ハヽ又左て何らの事も然ハ弥
心ひとつにし建立家法礼儀をみだりに能
慎守る時ハ益栄へる故理之各其心々か
まが心をくみ家を計て事故なきを能隔
る己を立人を計ざるハ外側とも内和せん
ふくせざる時ハ乱之此旨能く心得へし
者生る時ハ家業故忘ま其商よおろそかなる
時をあんぞ繁昌せん只一家ハしたしく身故
慎み私なく眷属を能なくみ家業
におひて参なき時ハ弥繁昌相續て致事

一商人ハ不断之心掛る所き時ハ他より其商故
うほう是等の利多年心に無怠惰商の
みなる故能勤眷属故養ひ内を治免外家
業をおろそかにせず家栄る之大工ハ家故
作るにも頭領有り其夫ての大工なくんば
あらず頭領能時ハ能出来る皆是諸共
ありして頭領能下故遣へばなり
一手代故見立美事専要に扶少き志つを
あがて大き成益を捨る事なれ少之
益を取て大き成志川を求る事ら家来
ハ能も何一切も又主人なる者ハ心之昔より

能大将軍なるも能家臣あり悪敷主にも
行しき家来ある是上くらきと明らか成との
遣之家業にくらき主も其手代の働抜
しらず下に能もの有ても用る事なく
以なつらに差出をも其ものは主のくらきを
うらみ退く心出来る者之情上に有る手
代も下材能気ぐみて私なく能を上な
用ぬ悪敷材もむき上下心を合し事材
なきぞ成らざる事なし　商も的の志とし
手前能調る時も何なんだと云ふ事なし
商に是を限りと云ふ事なく能働も繁

昌に至而何れ共孰も商減少に然者功有る
者材能取立て立身中付る時もたのつまり
外共何れき商も能く成る道理之実を以
て人をつかふ人も人又実を以て志ぶかふ耶な
きもみなくのことし　かまえ我よ有よく
可在事

一田舎も自然と奢なく物に移る事とあらし其
上それぞれの地まりておのつから慎故所
人永く家續く江戸京大坂者諸公儀より
時法度之外恐るゝ事なく諸事に付結
構を見習ひ奢出心高ぶり身に位材付

夫より家業も昧略ニ成申故二代三代僣
ニ親共ニとく繁昌相続致候も共々各ぐ以
候前事のしらべを見て後事の誡の心持
忘れぬ様慎可申事
親分之事弁仕置之次第
一親分ハ一家惣親分と相心得其以下のものハ
実ニ親共ニとく能仕其志ニたがはぬ様申
付ル迄急度相守可申候 宗印 宗利迄ハ
大元四軒之内順親分ニ致し可申事 夫迄ハ
八、惣領家故八郎右衛門親分ニ致成可申候
併八郎右衛門 宗八ハ承 宗栄養子ニ宗寿

叔致無之事
作去いかなる者ニ候共一ッハ八郎右衛門後見ニ而
人一代ニ成候而諸事相続致以家督
可申付候実ハ依八郎右衛門果後ニ至り幼年
ニ実ハ順々ニ本家六軒之内年寄
成もの両人宛親分ニハ成可申事
但八郎右衛門家ハ以て迄も惣領家ニ而立可
旨宗寿遺言之然とも八郎右衛門悴いかなるニ
無之候とも其器量見届其時共親分
惣領家之相譲り其節の親分之後見ニ相
成かんがへて致尤挨拶ホ之義も順々ニ心得

又ハ年寄成も其心得を以時ニ見合
家之違を以親分之もの可申付候尤いつ迄も
兄弟様ニ可相心得事
附末々宗印宗判を始親分より成候時同
苗のもの共ハ正月鏡餅差ヘ可申遣候
八郎右衛門方之儀ハ惣領家に候ハゝ先々
迄も正月鏡餅送り可申ハ勿論一家
妻方并手代共椀飯差迄之通八郎
右衛門方にて祝ひ可申事
一同苗之内親分之指圖を不請家業ホ疎略ニ
致し不届のもの共ハ同苗相談之上隠居致させ
世候とも又ハ勢州に拝籠仕候節申付夫
共別心有者ハ評儀之上手前之列外
除可申事
但其節其者之身上三分一相渡別家
に致し可申候左様之砌違乱申不致様
一是れ是後家之もの我意を立親分并同苗
共心に不叶儀於在之ハ異見を加へ候上
得心無之候ハゝ縦成人之悴ニ候共同苗
評儀之上差又勢州へ隠居可申付事
但科ま軽ハ評儀之上隠居申付候上ハ
軽き贈料可申候尤伊勢隠居之跡

男女ともに於違背ハ勢州奉行所へ一
急度可申断候、御成敗作法之通可
付候事
一同苗名跡之儀子供無之候ものハ随分同苗の
内より養子致し相続可致候、男子無之候
ハヽ女子にても養ひ名跡相続致候様相
心得可申事

覺

一本家六軒　惣領家　八郎右衛門
元之助
三郎助
治郎右衛門
八郎次郎
宗八

一連家三軒　了栄隠　則右衛門
吉郎左衛門
降証三代目　小野田八助

右連家三軒取立候由緒書別紙認置之
一各身上割法之定書如左
高弐百四拾也
内

六拾弐才　八郎右衛門
三拾才　元之助
弐拾七才　三郎助
弐拾五才　治郎右衛門
弐拾弐才　八郎次郎
是ハ宗笠割之内ゟ出候此訳別ニ記之
弐拾弐才　宗八
是ハ宗盛割并宗栄割之内ゟ出ル両方合
如斯ニ候訳別ニ記之
八ツ才　則右衛門
六ツ才　吉郎右衛門

是ハ宗秀心当之割加ハ宗秀跡ハ
割方なく此訳別ニ記之
七ツ才　八助
是ハ宗笠割之内ゟ出ル此訳別ニ記之
〆弐百拾
拾才　金蔵
但此金蔵ハ本家連家次男并末子
取立之心当建置申処之
合弐百弐拾之
一本家六軒連家三軒
合九軒身上一致之家法也

但此男子ニ至リ自然別家取立候とも
元手銀も相渡し自分賄身上致候此
子細奥ニ有

一宗秀儀も不届故割も無之候、併兄弟之儀故
是迄少々宛賄料遣し置候、此も結果候
ハヽ、其節ハ後家一軒宛養遣し可申候
万一同苗共身上引分ケ中節至候ハヽ
銀高五拾貫目宗秀跡相続之者ヘ相遣
し可申事

一寿養儀子供も無之者之事ハ依之先達テ
金子弐百両遣し置候処右之金子寺方へ一

詞達ニ而中由外ニ何之積も無之ハ此者一代
是迄之通養ひ可申事
但此後之義も同苗とも相計年忌等
の義由緒も有之候ニ付八郎右衛門世話可致
事

壱ヶ年
賄料左之通

一銀九拾三貫目　八郎右衛門
但割付壱人ニ付銀壱貫五百目宛
一銀四拾五貫目　元之助
一銀四拾貫五百匁　三郎助
一銀三拾七貫五百匁　治郎右衛門

一銀三拾三貫七百五拾目　八郎次郎
一銀三拾壱貫七百五拾目　宗八
一銀拾弐貫目　則右衛門
外ニ弐貫目役料
一銀九貫目　吉郎右衛門
外ニ弐貫目役料
一銀拾貫五百目　八助
外ニ弐貫目役料
但本家連家とも家督幼少ニ有之故ニ
年弐十才迄ハ建ニ賄銀致減少相渡
可申候尤幼少之内ハ一家世話ニ一統附り候

右之付如斯
一勢州殊林寺名前之庄兵方ヘ引請候ニ付
一代之内同苗ゟ是迄之通賄料指遣し
可申事
右相定候賄銀切府之外一切相渡申間敷候
尤家々ニ張銀も有之候て元方一統りに致
吉年五歩程利足被加致勘定可遣
事
但同苗並処向役人共元年銀引当として
賄銀之外割怯壱ヶ年付一ヶ年銀三拾
貫目元方ゟ退座預りに致し置

乍事
一賄銀之建今度改相認候ニ付我当前ゟ
存、鯨と申四五割方宜敷相建置候処
今迄之仕来を色々の名目を付元方へ取
出し筋も粗相聞へ又は端成建致し置候
ニ付向後に至り候て相定候員数急度相守
遣繰し元方へ頼事に付候様致させ度
彼是と申如此過分の賄料ニ相定候
付而ハ迄も手之当得候其分限相応に
相心得過不及無之様に堅く存、勿論
右賄料の建も手前当時繁栄の最中

相定置間此末商売何ほと余慶出来候
時節に至り候も於賄方ハ右員数之外加増之
相談未ニ申て仕候員数候畢竟身上向之
存じ候内建を以くらに氣強付候へハ如何
様とも遣ひ候世中事に付勿論右定之
銀高聊以勘略致す事ー地建は別の者
有之無之者ハ銘々加減と存候に候約
し心さしある可からさる事
但此末都一江戸京大坂大難其外時節到
来にて商売之出目無数不勘定之節ハ
其時の親分又ハ元来掛りのもの共より

賄料減少之趣申渡候間兼而其覚悟
もて致置候たとひ以来迄も不相変繁昌
致し候とも元来断人を禄無之者に候へハ
五七年ニ一度宛皆々申合候約を仕
右定の賄料半季の遣ひ方ハ壱ヶ年ハ
遣ひ合候様ニ折節も身上之賦ニ仕候
然も家のたゝ身の分見宜加候是以て自
然ケ様之事も兼而思慮いたし可致事

一我等七十余歳ニ成候ヘハ此末一ヶ年ニ而も生延候
内ハ右銘々共賄方の儀遣ひ延し元方へ預
りに成候とも又ハ一盃に致し候とも一ヶ年に
一度々元方役人之者共ゟ急度我等へ見せ
可申候尤前一ヶ年の渡し高正月三十日
迄ニ受取持参可申事

一同苗之内病身ニ而家業も不勤引籠
居候ものハ不普請金として賄銀定之
内弐割減し相渡可申事
但右不普請金元方ニ積置其節帳役
精出し相勤候同苗一配分ニ而申付事併
不時大病ニ而床に臥居申者ハ可為
格別事

隠居料之事

一銀拾貫目　親分料
一銀五貫目　本家隠居料
一銀三貫目　連家隠居料
右隠居料ハ夫相果妻斗ニハ右遠慮之内
四分通銀高相渡可申事
一自今以後六十歳前後ニ而相続之上其身
浩躰致し候ハヽ不苦身ニ而成候ハヽ其時
節迄縦令一所ニ居申候とも内證隠
居分と相心得勤ニ成ても同前相勤右隠
居料も前ニ記し候通相渡可申事
一本家連家とも惣領之外子供出生於時も

壱人ニ付定法賄銀之外壱貫五百目宛別ニ
相渡可申事
一惣屋根ふき替入目其外無拠節ハ見違
相続普請ニ致し候ても元方ニて見分之上
積り書を以右銀高相渡し可申於
尤跡ニて入用一切請申間敷事
但弐貫目以下之繕普請ハ自分賄ニて為事
一大病ニて格別人参等用ひ候ハヽ聞届
相渡し可申事
但弐貫目以下の人参料ハ自分賄可
為事

一新造普請之節ハ歩割ニ付銀高
弐貫目之積リ銀以相渡候間其餘ハ
一切元方ゟ相渡申間敷事
但新普請仕之節ハ類焼とか又ハ極
大破ニ付同苗相談之上相寛可申候
割法之通リ身体相應ニ急度可相心得
事
一同苗とも祝儀取遣り又ハ不幸之節店之
遠慮之次才割帳之達書ニ有之候間以其趣相
心得可申事
一同苗相果候節ハ遺物金の儀其身上

相應ニ相心得可申候尤右銀高元方ゟ
借ニ致置候ハ名跡之もの賄料之内ゟ
以て十五年賦ニ返納可仕事
但葬禮佛事入目割帳相達置候右銀
高遺物一に十五年賦ニ返納可仕
事
次男并妾子之事
一次男并妾子ニ至其親より高元手銀子とも差出
候ハ先ハ其親の分別たるへく候勿論其
時の親分のもの并同苗元ゟ相談致し
片付可申事

但縦令百貫目より五拾貫目迄
賄銀之内を以十五年賦ニ致し元方へ
引つき可申候残五拾貫目ハ元方より
其親へ借し二相立置申候一身体別々ニ
相成節ニ至候ハゝ右借し銀高銘々ニ割
銀と義引可申事

一嫡男迄ハ同苗之内ニ而不幸ニ為思慮別家
ニ取立候も其親心次第ニ致候其外子共
多く出生致候ハゝ随分他へ養子ニ遣し
可申候尤元〆名代之内たりとも子供無之
者ニ末子の内見立遣し候様ニ可致候幼

少の節養子の口も無之店ニ相勤候ハゝ
手代同前子供の時より相働らき可申候
追々成長致し三十才前後ニも相成養子ニ遣
し候とも別家ニ取立候とも其者器量勤
柄等を見届可申候仲ヶ間より合力の様ニ割
方等致十ヶ年の銀子の内を以親分之者同苗
并元〆相談の上程よく元手とらせ可申候
嫡男末子とても仲ヶ間合力ニ而高同前ニ
但我才存生之内思召方左之通

一器量之者　　丸銀三千枚位

一大躰之者　　丸銀七八拾貫目程

一中位之者　　凡銀三百拾貫目位
一次男末子別家に申渡候時末子に至迄
其家名を越後屋と名乗候とも名字杯ハ
三井を不名乗　勿論不然筋も
可有之候其節相談の上可申付事
女子之事
一女子ハ其身ニ随ひ同苗の内へ片付候様
可相心得候若他所へ遣し候ハゝ左の銀高
元方より相渡し可申事
女子婚礼拵料
一歩割拾分迄壱分ニ付弐貫目宛
一歩割拾分三拾迄壱分ニ付壱貫百目宛
一同三拾以上壱分ニ付八百目宛
但女子同苗内へ縁組致候ハゝ右拵料
年賦之銀高相渡し可申
一他所より娘迎候ハゝ右建之銀高三歩壱
相渡し可申候
右之通元方ニ而一切ニ致し指遣し可申事
一縦総領たりとも不行跡にて一家の害にも可成ほど之
者一子とても勘当致し可申候尤同苗より養子
致し跡目相続為致候其外総領に限らず凡其
身愚鈍に生得一分之渡世も難成ものハ出家を為

致候様尤飲料之儀ハ親ゟ己續候ハ其
外子供多く出生の家にて前に記し其通り随分
他ヘ養子に遣し候も勿論養子に遣し其迄も
其もの商の心の候者ハ先抜まても役に立不
申ニ付一七幼少之時ゟ手代同前に店勤させ
艱難致させ尤寝作共手代同前店にて致させ
可申事
一店に三年勤定の節復銀者法を以年々納
させ候抜年期取り先納致抜ハヽ定の歩
合相渡し可申抜店に復銀多き時者却て其ハ
有之商の工面ならず道理不宜抜間此所よく

相考可申事
一究蔵金銀出入之所元方月番之同苗元メ
立會出入て致、封金の所を江戸表壱万両
京都四万両都合五万両之貸数指置候以
其餘ハ当分之入替また質物貸等心掛随
分據成所可届銀廻しして致抜封金を両替
店究所に差置夏一度宛封仕替其外二ヶ月
壱度宛見届候抜餘慶銀を本店土蔵ニ差
置封致置毎度立會出入可致事
但究所封金の仕形当前弐万両已之抜此末
年季弐千両宛壱ヶ年四千両相納有五

金両之都合致し上者其節可届可有之
事
一今度相改惣延銀之内十年に引十分一之銀被退
置是を相続銀と相定古き年代之身上をとゝへ
候者其外大事に逢候ものを撰ひ此内十分一
を以借財之奉加為標節合此銀にて可渡之
致、尤此銀無之節支無用とて致抜不申事
相談を以て計ひ可申事
但此法違失候者一家いつ迄も繁昌之主意也
其勢を以一旦困者もめぐみ下一満足にて
長久繁に永く栄一を祈る時者其徳被

下一段に至天の道理古今の多し之然を延
銀之内被退候を満る被為く故り此徳を以家
長久のためを本ならん此旨能々可存事
一君末々に至同苗共之一別に成之候在之時
一本店　壱ヶ所
但江戸京大坂弁上ノ店紅店
一綿店　壱ヶ所
但江戸京大坂伊勢
一京両替店　壱ヶ所
一大坂両替店　壱ヶ所
一江戸両替店　壱ヶ所

一本町壱丁目呉服店　壱ヶ所
一糸店　壱ヶ所
一小名木川店　壱ヶ所
合八ヶ所
右店々之内第一番総領家八郎右衛門存念ニ而何れ
の店ニても取退候節ハ夫より家の傾ニ相成候間
望等取退き申候如斯申置候者連家の者取退
き候店不足ニ相見得候而連家のものとも自分
割方之銀子請取候積ニ相心得尤其者之
心まかせニ店々へ相加り渡世致し度候節ハ勝手次第
可為事

但其節江戸有家之持ちハ銘々へ相配
分て致事
一先未々ニて至諸國大変抔と申ハ一ヶ有之手前商
賣躰難成時節其外天下一統の御停止ニ而
て商躰も数年成是迄の格式ニ渡世難成時一家
之者京住宅ニても身体之建急ニ除中一義も難成
物ニ候間左様の砌ハ惣領家一軒ハ京住宅ニ
致し相残る同苗共不残妻子共ニ勢州へ引
越申候積ニ而も心得、不好事ニ候の遠き慮
無之共近き憂有と禁言ニ依而是ニ連り思慮
致し置候然らハ同苗のもの兼而此大むね相心得

可有之事

但惣領家なりとも其節之様子により伊勢
住宅致候も可有之事

一縁者とも手代店見習店ハ一圓無之事、若相分り候ハヽ
共急用ニ付不如意成縁者ニて取立置其跡
店に差置候とて、右は公人並に致し差置不申候
家法商ひ作法、他家へ相洩らせ候へ候後日に手
前商賣之妨ニ相成申事在之と既手
前責作形江戸ニて伊勢店方様子問
及見及に付其趣相考前責に致させし
候に付置候左候得共当前ニて右様之儀ヽ

而も後に如何様之妨に相成可申候難計
存候間此旨能々心得可有之事

大元方頭領役之事

一親分一家続ニて同苗之内年ニ二十歳以上有
者共三人宛頭領役として大元方諸事店々
の儀引請世話可致尤月並内寄合致し
元〆示見習之名代立会商内評儀可致、
店々半季宛の目録差引之店を致僉儀
出させ元〆立会能々吟味専要に候其外
長崎商之様子質物并方之文金銀取
引并諸方出し切之品能吟味少しにても異

無之様ニ而致シ、大元方を根元ニ要ニ於而折
悪世上金銀取り遣りの様子并端もの一切
諸相場等相考候而諸事一統締方致候店之
役人並無油断共主人より折節氣を付申付候
一ヶ條油断難成時ハ難を打出し
承事吟味を詰又ハ毎度店ニ一廻り遣し
往来之様子金銀遣ひ方代物高下等聞届
可申事其外江戸表諸事為見繕毎年
一両ヶ月之滞留ニ而主人罷在下り申候
右者一ヶ江戸手代共之勵方旁等一段宜敷
旨ニ而相心得事

一定式月並寄合之儀ハ元方内寄合等弥末々ニ無
惰怠折々寄可申評議事
但建家内式目寄合之節詮議専事
一店々勘定目録之吟味最専要ニ候惣ト而目録
之金銀出入商之利益を相考ヘ仕立候
物故其目録のスッテ隠し有時ハ其訳詮見得
物と只不都店之様子聞届買方責方金
銀の遣ひ方等承事ニ候訳不存時ハ虚の目
録ニ候不鍛錬故吟味之上詮成候不都
商賣の基本ニ而第一之元ニ立會之上相談
目録上中下を定メ致無退大勘定の

節用録を書く　高下の仕法を立て就
中有物ニ吟味歩廻りの儀精々気を付
可申事
附大元方相建候已来店々商の仕形何も切
納建候以三年　勘定ニ而切納残銀高
其ニ十歩ノ一割褒美遣し候以配分為致
此先方已来店ニ励ミ申し就中　暑置
表なとも出来不致益ニ而宜き方に相
見候て先右之建方手代共流志ぼいたに
類　面白存候併仰程結構なる建方てハ
手数も経候て定り事のやうに　存

商たるみ在之物ニ候て三ヶ年一度ツ細改
致し同品ニても世帯ミ出ら様ニ工夫而
付候
一店ニ名前勤方之儀手はき者を其人の器量
并親分并頭役ニ而も見立候図而任せ
新法商禁制之事
一祖父より大名債し小判の持ちた牡丹商禁ずる所
之ニ新法商の儀人勤候とも用ひる間布候余店
小名木川店其外　共の店にも能心得可
有之候多とハ新法の店ハてかしき利有之
共不知商売ニ付て者心遣ひ多く之然共

祖父より傳たる処の商賣の道を自然と照
きに成ものまて此者能く可存 併此末元
方復銀之品により長崎商の儀を致させ
中候もて立こし候み元方にて拵成ハ積價
ヲ取存 或は然共質物ト相成ても直打
高き物をも下りを請拔ヌ 能れ物柄者質物
入物ヌ心を付長崎物を代もの、正体本腹
の吟味專要之事

子孫家業ハ見習之事

一男子十三才まて京本店にて召遣 子供同然に仕
どに致させ諸事仕ハ方店見習 十五才江
戸本店へ遣し 三ケ年 相勤 初登致し
出京之上 又本店にて召遣 此節者 一方の買方
乗り帳面当り等役目相勤させ 二十才ニ而 又江戸へ差下
し此度者本店にて一方の役銭請取帳面等
の儀委く存迄 二十四五才まて登り本店へ
前のとをく相勤 買方帳面等の儀を相
覚へ 其内一年 大坂へ差下り 才二 呉服店
並拔て呉服方之諸 不案中 両替店 綿店買方
見習 又廿八九まて 江戸へ下し 此度者綿店
在勤 一切を見覺 此節 上州 又者 郡内
山方買物とう 処々見廻り見覺爲致 拔

尤二十以上ニ而店に在有候内処て目録之
篤ト支配人と立會勘定致し方自分手
掛尤判形仕而指出候〆之外一ヶ年斗京
都両替店にも相勤候事候三十以上ニ而夫
より親分之者勤方指圖ニ而付候て其
者相心得候事

公儀相務候者可心得事

一御用に付公儀相勤候間ゝ已故一ヶとなり上坊
多つとめ而商使の勤忘るゝことと何れ世上多く
公儀勤もの或者呉服所銀坐等其外
御用向のも何共内證能もの一人も多くし是も

公儀を専に致し我等家業ゆ存候事
故如斯候事也て手前も商人ニ御用も商
の餘情と心得ベし然も家職を外にゆし
上下の勤を心とし店々の事従照に致し
々も大き成ル違候されども勤方をろか
に成候事勤も表向き勤と家職の餘を
両輪に心得ベし其承之御用にも以
有時も其もの、不念出来成候而能ゝ相心
得大切に可存事

他國相勤候者可心得之事

一江戸大坂他國勤番の面々者猶又年の

大将軍の志として益心に無油断家業致
可勤候者人の器量大勢之中より尤之雖然し
他國へ致勤番候とも晴かましく候其時ニ
の風俗商の行方なと承り候節親方の
者元より元ノ立會て承り候間油断有之
敷候店ニて商之趣又ハ時々世上の様子承
状抔以元方へ往来て致候事に據り京
都々中迄も候得共其品により用ひ難き事
無之物に候左様の時ハ於其所相談
之上取計ひ申候上に立もの多き所ニ而ハ
なのづから慎ミ候一共他國にてハ我一人

に候故自然と氣たるみ怠りかまし事も出来物に候
間我慎候事専要に候已正しからざる
時ハ下の取締も成ず能く心得居可申事

紀州様屋敷勤方之事

一紀州御屋敷ハ手前一家の地頭也以て近も
御大切に而相心得候松坂之上市金吉
一統の割の節京都上市金是ハ伊豆蔵
方中合相應拾上市下市候或ハ御期
境又ハ御成其外表立候不時御用
之節ハ大形寛永御下の者京都出入
方のものともへ御用金事御付候相関

一候ハ北方より松坂京ニ而上下申程越
積り御返済之儀も御勝手次第ニ而下々之
北方より却而先ニ御壽公として配申
不申ても宜之候左候ハヽ一も被仰出候上ハ候
よりも少分ハ早も相済ミ御壽公之不及
在成下之京松坂ニ而相勤候もの時
節を考勤方ニも有し又松坂ニ而所役
年寄共勤候、同苗のもの一人之御奉
公ぶり仕却而悪不調法なと有之り申
事も出来候ニ付同年寄役勤候もの
共之人並ニ心得候事難出来不申大

体も勤申候従人衆一同勤候儀之随分
心懸懇意を請候様ニ致候勤方之儀も
其人の働心得方の儀ニ候得は不及申候
先々の趣も心得可申事
但上下金の利息之入ニ不致元方預りニ致
金子積置申候追而上ハ金方御返
済ニ而候節之儀預り被出し候引
申事

牧野御屋敷勤方之事

一牧野御屋敷之儀紀州よりも又候遠候大切
公儀御代御懇意を請候事ニ候分是

造御屋敷ニ無如才相勤来り候此末とても
不成程之首尾能相勤不申候金銀取
替之儀も三四千両迄も御用達其余
見届不申候て貸金銀損ニ致し候事
出入致引不申候大名貸銀高積り
大損致候て損致候少の内ニ見切不申故
段々銀高相かさみ末ニ至り大損ニ相成候
間兼而此趣を不存候先成丈ケ銀子取
替不申彼方之工面見届不申事

屋作道具所持之事

一各々屋作等之儀其分限を不存候道具
等之儀も種々有之候如何程の大家を
構へ数々の道具を所持致し候而も能
之事ニ候ハヽ又無数とて事の不足たる
事もなく只候餘計ニ致て存候奢り候
致し心得構へ移り候時ハ如何程ニても
不足たる事ニ而人情候間能々考
不申事

佛神信心之事

一佛神を敬ひ儒学候心掛候事人道
ニ候然し是何れ共ても過き候へハ其身之
家業怠りおのづと異形の人之様ニ相成候

佛に心さし過たるものハ出家の如く候
神道にたよせ祢宜巫子やうに成候而者
又利まくつし人欲何ぶとる者のつと商賣
跡く成家滅に及それし行作を乱る
に外し事ニ不宜欲称し代々の家職陳
略に致し候事ハ佛神ニ妙慮に叶
まじき哉又佛神の為先に金銀を
施うち莫大の費致候事ニ大き成以
の事と存ー佛神者其人の心に在然る処
まーく候中以才の仕形を先祖の不孝

其身の私欲より外なる事ニ候
親類たりとも何ぞ其非をとがめぬ堂
社のみ先に金銀を費し候分看属賑し免
じても時者一倍一万倍の利また功徳廣大
ならん然る故免ぐもべき者を免ぐまだしく
信心に偏屈故左やし候事ハ以て成らざるや
真故以佛神に向ひたりとも感應なき
らむ能々考へ存る事

元ノ役ニ事

一元ノ在家の守り神一元役人ニ候主にしか在時
者誅など入下に非何れ共是を異見べし

上下相調候而家の治り候心掛専要に候
主人たる者も猶元〆にも其心入致し下の下知
届兼候様の致方尤に候主人より重役其言ふ
を用ひ請る時はおのつから下其下知に遵ふ
事なり一体今年老候者は却而物古と
こんどやうに成申物に候へは元〆役人も五十
五六歳限り可申候兼而其人を見立見
習に差入可申候尤も年老候とも末而勤
躰又は心得宜しきもの故年数にも限り申ましく
較候役目ゆるく候とも事に依り以之迄も
大切の相談にも相加へ寄會等にも加勤

させ申候而も宜しく候間其心得可在事
但元〆役器量者を見立新に申付候時は
名代ヶ様出し可申候然る元手金等を
名代役勤中預置候上ハ自今ニ而も
大元方より元〆役料可被下然る上は其
店掛りより役料相止免元方一方口に而
付可申候尤元〆ニ申付候ハヽ格別之
働在之候ハヽ同商相談の上臨時に褒
美又は元手銀加増なとの仕形も可在之
事

附元〆役人数六七人ニ可限

此内

江戸表　弐人

京都　三人

大坂　壱人

右如斯相建本店両替店錦店其外店々割

を以兼帯ニ而致諸事手如本家之様に

可申渡事

一異國の國主に十人之男子を持り其親及末期

十人之子供各枕元へ呼よせ壱人ニ矢一筋宛為

持右之矢共折候へと申聞候時十人共に矢

を折る又矢共十筋一処に束ねて惣領より

折候様ニと申渡させ候時右之矢曽て折

れ不申次男へ申付候ても折れねば十人共に壱人

の力ニ而ハ不及由申時親遺言として十人

の兄弟一致申候ハ我か相果候已後兄

弟一致に心を合せ諸事申合一励むへし

右矢の如く一本に候ハ折れ易きも十本束

ね候ては折る事難し各兄弟心を合せ候時

時ハ國に危き事なしと諭申垂候由手

前家之道是ニ相叶候宗寿居士兄弟

之遺言猶自今本家六軒連家三軒此

九軒之兄弟一致之家法之儀急度服

ともに兄弟の通りに　尤始終共大元方
より仕し通り請取候分限相應の格を以兄弟
一致に相励一切論序に認候通り挨拶
行作其時々親分之者申渡候通聊無違
禮急度可相守候事
一元祖宗壽居士尋贈大姉一生の傳記ニ予連
家取立の由緒列ニ記置者や子孫能々其旨
致存寘加相叶候様可致
但宗印作し商賣現外に在り
一右末々ニ至迄上面ニ書加へ申不申と在し候ては
其時々親分惣同苗并元メ才立會評議の

上通り利に任せ書載不申事
一子孫ニ至迄此遺書の趣親分の者申聞せ
服々判形致させ置可申事
右之條々爲遺書申渡置候
何れも無違背急度可相守候以上
宗笠
享保七壬寅年十月朔日
右之趣者宗壽居士遺書を以宗笠ニ此度御改
如斯被仰渡候間何れも末々共ニ此書附之通り
急度無違禮相守可申候爲其両人之者
判形致置者也

宗印
宗利
右御書附之條々奉畏候、為其連判仕候、以上
八郎次郎
宗八
八郎右衛門
元之助
三郎助
治郎右衛門
源五右衛門
吉郎右衛門

則右衛門
宗五郎
八助
新八
金蔵
元蔵
治兵衛
則次郎